

暦の上では秋であるが、まだまだ暑い日が続いていることだろう。東京は7月31日から8日間、大阪は11日間連続、最高気温が35度以上の猛暑日となった。八戸でも8月5日に36・1度を記録した。昨年の夏以来エルニーニョ現象は続いており、今年の夏は冷夏になる可能性も高かったのに、なぜ猛暑になったのか、考えてみたい。

歴代最高気温の第1位は41・0度で、2013年8月12日に高知県四万十市江川崎アメダスにおいて観測された。第2位は07年8月16日に埼玉県熊谷市と岐阜県多治見市で40・9度を記録したわけだが、その前の記録は、1933年7月に山形市で記録された40・8度であった。これらの観測場所はいずれも内陸部で、フェーン現象が原因といわれている。フェーン現象とは風が山肌にあたり、その風が山越えをして下降気流として降りてくる暖かくて乾いた風によってその付近の気温が上がる現象である。

4度より高い。猛暑日の日数は、東京7日、大阪14日に対し、熊谷19日、多治見20日である。一方、夜間の最低気温が25度以上となる熱帯夜の日数は、

「ダイポールモード」が原因？

私見 Sunday 創見

熊谷9日、多治見3日にに対し、東京22日、大阪24日である。東京や大阪で熱帯夜が多いのは、ヒートアイランド現象が原因ともいわれている。

今年の夏の場合、全国的に梅雨明けをした7月28日〜8月10

今夏なぜ猛暑

日の2週間の気温の平均値と平年値を比較してみると、沖縄の0・2度を除くと全国的に1度高く、東日本では2度高い。太平洋高気圧が日本の南にドンと居座ったために全国的に暑くな

三浦 和彦

東京理科大学教授



みうら・かずひこ
1955年、八戸市生まれ。2014年から現職。日本エアロゾル学会副会長、NPO法人富士山測候所を活用する会事務局長。東京都在住。

ったのである。

さて、エルニーニョ現象とは、太平洋赤道域の中央部から南米のペルー沿岸にかけての広い海域で、海面水温が平年に比べて高くなり、その状態が半年から1年半程度続く現象のことである。これとは逆に、同じ海

で東部で海水温が低くなり、西部で海水温が高くなる大気海洋現象である。インドから日本にかけての気象に多大な影響を持ち、太平洋高気圧が活発化する。エルニーニョ現象とダイポールモード現象が太平洋高気圧を引っ張り合う状態となり、エルニーニョ現象が強い時には冷夏、ダイポールモード現象が強い時には猛暑となる。今のところ、ダイポールモード現象の方が強いということであろう。

さて、お盆も過ぎ、熱中症の心配も薄れる頃であろう。環境省熱中症予防情報サイトによると、アメリカで提案された「暑さ指数」は熱の照り返しに着目した指標で、①湿度②日射・輻射など周辺の熱環境③気温の三つを取り入れた指標である。湿度が高い場所では汗が蒸発しにくく、身体から熱を逃がす能力が減少するので、熱中症になりやすい。直射日光の当たる部屋、炎天下での運動には特に注意してほしい。立ちくらみ、こむら返り、大量の発汗が見られたら、適宜水分、塩分の補給、休息をとるなど注意してほしい。